

日本フランス語フランス文学会

cahier

29

mars 2022

I 2021年度秋季大会の記録

ワークショップ

- 1 『未来のイヴ』を再読する——十九世紀フランス哲学・科学を起点として
福田裕大 野田農 相澤伸依
上尾真道 中筋朋 2
- 2 Témoinage(s) de littérature——文学は何を証言するか？
辻川慶子 Judith Lyon-Caen Dinah Ribard
嶋中博章 杉浦順子 6
- 3 La Didactique de la littérature française en licence au Japon
Marie-Noëlle Beauvieux Éric Avocat
Raphaëlle Brin Yosuke Fukai 9

II 書評

- 森田美里 (著)『フランス語の話し言葉における舌打ち音の研究』、くろしお出版、
2021年
安藤博文 14
- Gustave Flaubert, *Cabane fantastique, édition diplomatique de la deuxième version (1856) de La Tentation de saint Antoine*, édition et introduction par Atsuko OGANE, Genève, Droz, 2021.
金崎春幸 16
- Takayuki KAMADA, *Balzac Multiples genèses*, Coll. “Manuscrits Modernes”, Presses universitaires de Vincennes, 2021.
Takao Kashiwagi 18

I 2021 年度秋季大会の記録

特別講演 1

Flaubert sans frontières : rencontres, transferts et autres métamorphoses

Florence GODEAU (Université Lyon III, École normale supérieure de Lyon)

司会 Marie-Noëlle BEAUVIEUX (広島大学)

in *LITTERA* n° 7

特別講演 2

L'écriture de l'émotion dans les *Mémoires d'outre-tombe* de Chateaubriand

Fabienne BERCEGOL (Université Toulouse Jean Jaurès)

司会 萩原 直幸 (岡山大学)

in *LITTERA* n° 7

ワークショップ1

『未来のイヴ』を再読する ——十九世紀フランス哲学・科学を起点として

コーディネーター：福田裕大（近畿大学）

パネリスト：野田農（早稲田大学）、相澤伸依（東京経済大学）、上尾真道（京都大学）、中筋朋（京都大学）

ヴィリエ・ド・リラダンは、多くの文学史において「科学」や「実証主義哲学」に反抗した作家として紹介される人物だが、実際には当時の科学・哲学の先端的動向にかなり強い関心を寄せていたことが見て取れる。とりわけ『未来のイヴ』という作品は、その文章の少なからぬ分量を件の人造人間「ハダリー」の身体描写に割いており、それら一連の記述のなかには、身体をめぐる同時代の知との深い繋がりを感じさせる要素が認められる。

例えば、ハダリーのモデルとなるアリシア・クラリーの身体が、写真や録音技術をはじめとする記録機器によって客観的にデータ化されうる、との想定がある。あるいは、神経系を思わせる金属線のネットワークが、人造人間の各部位を連関させて、ひとつの身体機能を生み出していく過程を執拗に描写するパートも存在する。一方で、こうした当世の神経生理学に通じる身体理解を積極的に取り込むようでありながら、同じく一世を風靡していた心靈主義・神秘思想に通じる概念が本作には頻出している。作品中で唐突に展開される「ソワナ」の憑依をめぐるエピソードは、それまでに幾度も強調されてきたハダリーの機械的＝自律的な身体のあり方と真っ向から対立するものだ。

このように見てみれば、『未来のイヴ』は単純な意味での「科学風刺小説」などではなく、当時のフランスで生じていた身体観の揺らぎをめぐる複数の声を随所に配置した、ポリフォニックな身体論として読むことが可能である。こうした観点から『未来のイヴ』読解の可能性を新たに開拓するために、私たちは専門分野の異なる複数名の研究者たちによる共同研究を進めてきた。本ワークショップは、こうした共同研究の成果の中間報告に相当するものである。

一読してわかる通り、以下の報告はそれぞれ固有の問題意識を有しているが、準備段階で全員が基礎的な研究作業を共有してきたことが幸いして、単なる個人研究の寄せ集めにとどまらない有機的連携を実現することができた。各発表者の議論が、いずれも「ソワナ」という神秘的存在の孕む謎・矛盾の方へと収斂している点が、その何よりの証拠といえるだろう。このテキストの裂け目のよう

な存在は、文学作品をそれとして成立せしめる創造行為の内実を把握するうえでも、ひとつの言説の編成がもうひとつの編成へと変容していく際の運動を思考するうえでも、非常に重要な観察対象となりうるものである。今回のワークショップの成果を受けて、ひきつづき様々なしかたで『イヴ』を読み直す作業を継続していきたい。(福田裕大)

フーコー思想とともに『未来のイヴ』を読む

相澤伸依

専門が多岐にわたる本研究メンバーが『未来のイヴ』を読み解くにあたり拠り所としたのがフーコーの思想である。「フーコー思想とともに『未来のイヴ』を読む」というとき、次の二つの読みが念頭に置かれている。ひとつは「19世紀後半の言説編製のなかに、『未来のイヴ』を位置付けて読む」ということ。もうひとつは「複数の言説編制を横断するテキストとして、『未来のイヴ』を読む」ことである。フーコー的な言葉を使えば、「アーカイヴの学としての考古学を実践」して、『未来のイヴ』を読むことを目指すと表現できよう。

『未来のイヴ』が書かれたのは、新たな言説編制が確立しつつある19世紀後半である。そこで、まずは、19世紀後半の言説編制を体現するテキストとして、『未来のイヴ』を読むことが目指される。目下私たちが注目しているのは、19世紀における技術の発展を経て科学化された思想が、『未来のイヴ』をどのように条件づけているかという点である。それは、端的には、当時の科学技術用語を駆使したハダリーの身体描写に示されている。

しかし、『未来のイヴ』は19世紀後半の科学技術の言説編製のなかにすっぽりと収まってしまふ小説ではない。「ソワナ」という不思議な存在が導入されることがその証左である。少なくとも、科学技術の言説編制の外部を持たなければ、この小説のなかに「ソワナ」が導入されることは不可能である。このことは、『未来のイヴ』における言説編制が多層であること、そして横断的であることを示している。『未来のイヴ』を、多層な言説編制が重なり合って生まれたテキストとみなし、その特異性を詳らかにすることが、本研究の目標となる。

『未来のイヴ』のテキスト生成過程

野田農

本発表では、決定稿『未来のイヴ』(1886)刊行の約8年前に遡る1878年に書かれた最初の短い草稿である「*Le Sosie*」(「分身」)から、同年の後半に書かれ

た、質・量共にまとまった草稿である *L'Andréide-Paradoxe d'Edison* (『エディソンの逆説的アンドレイド』) へと至るテキストの生成過程をたどり、それらの分析や、決定稿との比較を通じて、創作の過程にある作者の思考の変容について確認した。

『未来のイヴ』刊行に先駆けるこれらの草稿テキストの生成過程において、作者ヴィリエ自身の体験や同時代の科学界の動向が反映されていることが確認でき、そうした作家の伝記的背景のもとで書かれた先行テキストには、科学技術と自然の二項対立的な構図から、やがてそれらの二元論を乗り越えようとする作者の思考が垣間見られた。それは既に作家が『未来のイヴ』をはじめに構想していた段階で直観していたものであるが、テキストが科学技術をより具体的に描き、ハダリーの身体描写に関して小説テキストとしての具体性が付与されたかたちで描かれることを通じて、決定稿に近づくにつれ、より深化したものになったといえる。その段階においては、より超越的な次元が想定され、生命を再現することの神秘性、神的なものに対する信仰の重要性が説かれていると考えられる。その過程において、決定稿で導入されることになる「ソワナ」が着想されたのも必然的なことではないだろうか。

『未来のイヴ』における二つの未来

上尾真道

『未来のイヴ』では二つの主題が緊張を孕みつつ展開する。一方でエディソンのプロメテウスの野心の顛末であり、そこでは複製技術が切り開く未来が問われる。他方、そうした野心の彼岸に小説は幾度も〈神秘〉をほのめかす。このとき問われる未来は、第六章に見られるとおり、夢うつつのうちで、現在という時間に顕現する救済の可能性である。この後者の主題は、1878年『エディソンの逆説的アンドレイド』の起草の後、1885-6年の『イヴ』発表までにヴィリエが追加した主要な変更のひとつであるが、このことを考えるとき、この推敲を促したかもしれない同時代の思想的転回に着目することは興味深い。この時期、哲学では英独の実験心理学が体系的に紹介され、また医学ではヒステリー研究を主な舞台として、実証的アプローチのもと催眠現象、遠隔神経作用の研究が取り組まれ始めていた。ヴィリエについては、彼が早くから A.ヴェラの紹介を通じて親しんだヘーゲルおよびドイツ観念論哲学の影響、およびフランス実証哲学とそれとの対置がしばしば注目されるが (cf. 『クレール・ルノワール』)、1880年前後の言説空間の変化からは、物質と精神の対立をも反映する上記の対置が、新たな局面に移動した可能性が示唆される。すなわち神秘や精神といった不可視なものを実定性に書き込まれ、実在と見せかけの区別が消失する局面である。『イ

ヴ』では、この移動を示す手がかりとして「暗示」の語が頻出する。特に重要なのはハダリーの知性の二重性——この知性は複製技術の産物であるとも、神秘的存在のそれであるとも読める——をこの語が表現するときであり、「暗示」はそこで、見せかけにおける、見せかけを産む力それ自体の内在を示すものと読める。こうして『イヴ』は単に技術の彼岸というよりも、技術の発明的本性であるような靈性を描いたのだと考えられる。

『未来のイヴ』ジャンル考——幻想、SF、探偵小説

中筋朋

これまでの議論を踏まえて、『エディソンの逆説的アンドレイド』(以下『逆説』)との比較を中心にしながら『未来のイヴ』(以下『未来』)読解のひとつの具体例を提示した。この小説は、その題材からSFの源流としての空想科学小説なのかと思うと、背景にある神秘思想や幻想小説的な演出や余韻がそれを許さない部分があり、ひとつのジャンルに定めにくいものである。しかし本発表では、この小説を探偵小説として読解してみると、科学についてのメッセージを孕んでいるという意味での「科学小説」と読めるのではないかという仮説のもと、解釈を試みた。

すでに話題に出ていたように、『未来』においては、実際に見えるかどうかではなく、それが影響を及ぼすかどうかを实在のもっとも強力な根拠とする考え方が『逆説』においてよりも強調されている。『未来』において、この考え方は、科学技術をつくりだし見せるものとしての「太陽の光」と対比され、「闇と月」の描写が前面に出てきたときに提示される。またそもそも、この考えを体現するともいえる「ソワナ」という人物は、『逆説』には登場しない。

ではなぜ、『未来』において、『逆説』にはなかった考えが物語の大きな構成要素となっているのだろうか。本発表では、『逆説』とはやはり扱いの大きく異なる日蝕のモチーフが意味するものを分析しながら『未来』を「探偵が騙される探偵小説」として読み解き、探偵小説のもっているメタ構造を巧みに生かして伝えられる我々の科学とのつきあい方についてのメッセージを抽出した。

Témoignage(s) de littérature——文学は何を証言するか？

コーディネーター： 辻川慶子（白百合女子大学）

パネリスト：Judith Lyon-Caen（EHESS）、Dinah Ribard（EHESS）、嶋中博章（関西大学）、杉浦順子（広島修道大学）

本ワークショップでは、社会科学高等研究院（EHESS）の歴史研究者ジュディット・リオン＝カンとダイナ・リバルを招聘し、「文学」および文芸事象を歴史として捉えるための方法論と実践について討議を行った。会場を含めた文学研究者と歴史研究者の対話を目指し、日本側からは17世紀のメモワールを研究する歴史研究者嶋中博章と、20世紀文学を研究する杉浦順子が登壇した。

まず、嶋中博章が当ワークショップの講演者、ジュディット・リオン＝カンとダイナ・リバルの研究について、歴史研究の立場からその意義を紹介した（氏には、メモワール（回想録）を読み解きながら、歴史と文学の関係性について考察した著作『太陽王時代のメモワール作者たち——政治・文学・歴史記述』（吉田書店）がある）。「文芸事象の歴史（Histoire du Littéraire）」を掲げる二人は、文学作品を歴史記述の対象として扱うための視点と方法論を共有する。これまでも歴史記述に文学作品が取り入れられることはあったが、それはあくまでフィクションであることを断ったうえで、自身が描く歴史像に彩りを添える程度にすぎず、その場合もバルザックやゾラのような時代を巧みに写し取っていると評価された作家の作品に限られていた。しかし、歴史記述に引用可能な信頼できる文学とそれ以外の文学との境界を客観的に見定める基準など、はたして存在するだろうか。歴史家にとっての「良い文学」と「悪い文学」の区別という袋小路に入り込むことなく、歴史家が分析の対象として文学を扱うことを可能にするには「問い」そのものをずらす必要があると、リオン＝カンとリバルは主張する。すなわち、文学作品が、それが書かれた時代を正確に反映しているかを問うのではなく、文学作品が書かれたことそれ自体を歴史事象と捉え、その意味や作用を問おうと言うのだ。これこそが「文芸事象の歴史家」の眼差しである。

過去の出来事をめぐる証言もまた、歴史記述との間に、文学作品と同じ問題を抱えている。個人の経験に基づく証言は、主観的なものとならざるを得ず、その証言を歴史記述に取り入れるか否かは、歴史家の判断に委ねられる。一貫した問題意識に基づき、理路整然と構成され、巧みな文体で綴られた証言は、かえってその文学性のゆえに歴史家から敬遠されかねない。文学的証言を前にしたとき、

歴史家はたじろぎ、敬して遠ざけるという態度を示す。これに対し、リオン＝カンとリバルは、証言が文学ないしフィクションとして書かれたという事実を重視する。例えば、ソヴィエト強制収容所に関する文学的証言は、体験を伝えるために文学という方法が採られたという事実それ自身が、強制収容所の歴史の一部をなしているのだ。証言もまた一種の文学的エクリチュールと捉えるならば、文学は歴史家にとって特殊な問題ではなくなる。このとき、文学研究と歴史学という専門領域の境界は意味をなさない。二人の研究はそのことを私たちに教えてくれる。

この導入を受けて、ジュディット・リオン＝カンは20世紀の作家ピエール・ガスカール (Pierre Gascar, 1916-1997) の『死者の時』 (*Le Temps des morts*, 1953, 1998) を取り上げ、フィクションと証言の問題を提起した。自身がポーランドの懲罰収容所に収容されていたガスカールは、1953年に収容所の体験やユダヤ人迫害の目撃などを含む物語を「小説」として発表し、同年ゴンクール賞を受賞している。すべてが「事実に基づいている」と述べながらも、1992年に文学的脚色を排した「証言」として同じ経験を書き直している。それが1998年死後刊行の『死者の時——ロシアの夢、決定版』である。初版と異なり、簡素な描写で同じ事実が述べられているものの、そこで消去されたのは初版の持つ「小説としての体裁」つまり「文学性」であった。では、この「文学性」は証言と相反するものなのだろうか。

初版では、小説は「物語の渦中」から始まり、語り手である主人公に内的焦点化がなされ、自分の置かれた収容所やユダヤ人迫害の全体像がつかめないまま、見聞きした現実の断片が不確かなままに描かれる。これらの文学的技法は、まさに収容時および執筆時における不完全な歴史把握の状況を示すものである。さらに、1953年の『死者の時』では、花咲く墓場の描写が「古代の絵画や、或いは更に、古代の綴織やモザイク」に比較され、「子供の頃」の「記憶の中の古い植物標本」が想起される。これも単なる文彩ではなく、文学の記憶や郷愁の夢を必要とする程の収容所の過酷さを如実に証言するものなのである。ガスカールは1998年の「証言」を刊行することで、逆説的に1953年の「小説」が示す証言の真実性をあらわにした。文学的記憶や技法の必要性もまた、収容所体験の重要な一部をなしているのだ。

次に思想家ダイナ・リバルは、文学を歴史事象として考える一例として、19世紀の南仏のオック語詩人および陶器職人であったジャン＝アントワヌ・ペロット (Jean-Antoine Peyrottes, 1813-1858) の作品を取り上げた。モンプリエの博物館に所蔵される壺に刻まれた詩「壺の勝利」は、1855年に制作されたもので、壺には8連の詩の他、タイトル、献辞、制作場所、日時、作者の署名、注記まで記されている。労働者詩人であるペロットを通して、「文学を書く」ことが特定の時代や社会においていかなる意味を持ちうるかがここから読み取れる。

第一に、ペロット自筆の献辞に名が記された中世史家ジュビナルを通して、ペロットと中央文壇との接点が垣間見られる。ジュビナルは1852年に博物館を創設する以前にも、1840年には『フランス・リテレール』に記事を寄せ、当時風刺詩で裁判を受けていたペロットの詩を翻訳・紹介していた。「陶器職人」として紹介されるペロットは、一定の名声を獲得する一方で「労働者」「プロレタリア」「民衆」の声をいかに代表するかという政治的問題にも関与することになる。彼はユゴーに書簡を送っているが、ユゴーはその書簡にただ「民衆の声」を聞き取ろうとした。第二に、陶器の歴史という観点から見ると、一定の商業的成功を収めたペロットの陶器製作の状況と文学の接点の問題も興味深い。16世紀以降に当地では陶器製造が盛んになり、18世紀から19世紀にかけて興隆を見せているが、ペロットの時代には工業製品との競合の中で陶器製作は衰退しつつあった。工場労働者となることを拒絶したペロットは、陶器に文字を刻印するという新たな試みを行い、詩あるいは記念となる碑文を刻む陶器や、当時全く新しい土産用陶器を考案したのであった。第三に、「壺」というテーマに着目するなら、ペロットの詩はグルーズの絵画《壊れた甕》、ボーマルシェの『フィガロの結婚』、キーツの詩「ギリシャの壺に寄す」など一連の作品の中に位置を占めるだろう。ペロットの詩は「文学」および文芸事象が19世紀社会の中でどのように機能しているかを理解するための貴重な鍵だと言える。

最後に杉浦順子は、本ワークショップのテーマを文芸事象まで拡大し、20世紀とともににはじまったゴンクール賞に着目し、文学賞が、その初期において、文学的制度／権威として小説ジャンルの受容にどのように貢献してきたかを論じた。

エドモン・ゴンクールが文学賞を企図したのは、自分の名を文学場に恒久的に留めたいという私的野心と、有望な若手の創作活動支援のためであった。昔ながらの雄弁術を競わせ、何十人も受賞者にその恩恵を分け与えるアカデミー・フランセーズの旧態依然とした権威を尻目に、散文芸術だけを対象に、それを熟知する審査員がその年の最良の作品をひとつだけ選出するというゴンクール賞は、圧倒的な新しさと、散文芸術における最初の審査機関としての華々しい権威を有していた。ところが実際は受賞作のほとんどが早々に忘れ去られているのがゴンクール賞の現実であり、芸術認定機関としてのアカデミー・ゴンクールの危うさは、かなり早い段階で作家や文芸ジャーナリストらの間で言及されていた。それにもかかわらず、この賞が存続し、かつ成功してきた理由は何か。筆頭に挙げられるのは、その圧倒的な経済的効果である。ゴンクール賞に範をとり、無数の文学賞が生まれたことから、それは明らかだろう。

しかし、こと初期のゴンクール賞に関していえば、危うい芸術審判能力しか持ち合わせていないアカデミーが制度／権威として存続できたのは、まさに時代が、個々の作品以上に散文芸術そのものを聖別化する制度を求めていたからで

はないか。1903年のゴンクール賞の誕生は、同年ソルボンヌが修辞学（レトリック）から文学史へ転換したことと同様に、散文芸術の文学場における地位上昇を象徴的に示している。またゴンクール賞は、特定の作品を審査対象に含めないことによって、散文ジャンル内の芸術的ヒエラルキーを顕在化させる。文学の大衆化とともに成長してきた散文芸術は、いわゆる大衆小説と芸術性のある小説とを差異化するためにも、文学賞という審判機能を必要としていたのである。最後に、文学賞は一部の作品を大衆的であるという理由で遠ざける一方で、皮肉にも、作品をジャッジし、選別するという権威的行為そのものを民主化／大衆化するのに一役買って来たと言える。もはや受賞を拒否されるだけの権威さえ失い、恒常的に生産過多にある文学作品を分類する多種多様なラベルと化した文学賞は、そのまま21世紀の文学の姿を物語っているだろう。

四名の登壇者の発表の後、会場との質疑応答が行われ、19世紀の「純粹芸術」や両大戦の証言などについての質問が出され、時間を大幅に超過する白熱した議論が交わされた。リオン＝カンとリバールの論考は、*LITTERA* 第7号に掲載予定であり、質疑応答の際に示された議論や資料についても加筆されているので、ぜひご覧いただきたい。また、嶋中による上記発表の概要は一部修正のうえ以下のサイトに掲載されている (<https://www.paul-valery-japon.com/blog> 内の記事「『GRIHL II 文学に働く力、文学が発する力』(文芸事象の歴史研究会編、吉田書店、2021年11月)刊行に寄せて——嶋中博章」)。

ワークショップ3

La Didactique de la littérature française en licence au Japon

コーディネーター・パネリスト： Marie-Noëlle Beauvieux (U. d'Hiroshima)

パネリスト： Éric Avocat (U. d'Osaka), Raphaëlle Brin (ENS Lyon), Yosuke Fukai (U. du Tohoku)

Cet atelier est né d'un commun questionnement : comment, aujourd'hui, transmettre la littérature française à des étudiants japonais ? À cette question est évidemment liée un « pourquoi » transmettre, qui va venir orienter le « comment ». On peut dégager deux principaux problèmes propres à l'enseignement de la littérature française à des étudiants allophones : celui du rapport à la langue étrangère, et celui du rapport des étudiants à la littérature, bien souvent tenu, même dans le cas d'étudiants dans les facultés de lettres. Ce

second problème n'est pas propre au Japon : de nombreux ouvrages traitant de l'enseignement secondaire français soulignent la difficulté, pour les élèves, de créer du lien avec la littérature, et l'importance de l'expérience émotionnelle, sensible, subjective, qu'on peut associer à la notion d'appropriation, laquelle a été diversement exploitée dans les quatre interventions de l'atelier.

Et tout le reste est littérature – Le travail de la langue, entre ce qu'elle doit être et ce qu'elle peut faire

Éric AVOCAT

À contre-courant de la tendance au rétrécissement du domaine dévolu aux littératures francophones dans les universités japonaises, une place existe, incomplètement reconnue, pour un usage pédagogique du texte littéraire, à partir d'une définition souple de la notion : non pas académique, canonique, mais fondée sur le travail de la langue, le passage de ce qu'elle *doit être* (la norme grammaticale) à ce qu'elle *peut faire* (ses ressources expressives). Cette transition correspond à une zone d'indécision des cursus universitaires, entre la fin de la licence et le début du master. Elle se situe au point d'articulation entre la didactique du FLE et l'initiation à la recherche spécialisée en littérature et en sciences humaines.

Parmi les supports pédagogiques qui permettent de mettre en relation l'écrit littéraire avec son dehors (histoire, société, langue), et d'expérimenter divers modèles rédactionnels, peuvent être retenus :

- La chanson à texte : sa forte concentration en jeux de langage permet aux énoncés les plus élémentaires de porter les thèmes de réflexion les plus complexes.
- Un roman d'Annie Ernaux, *Les Années* (2006), qui organise une matière autobiographique autour d'une galerie de photographies personnelles : ce dispositif ancré dans une tradition culturelle (*l'ekphrasis*), se prête à une exploitation pédagogique consistant à inviter les étudiants à exercer leur regard sur des images d'eux-mêmes, afin d'y discerner les marques du changement social et le passage du temps historique.
- Des pastiches journalistiques traitant l'événement historique à la manière d'un fait d'actualité. Aux étudiants de jouer à leur tour le jeu de l'anachronisme : ils se projettent dans le passé, s'efforcent de saisir l'événement du point de vue de ses contemporains, tout en le projetant symétriquement dans le présent, afin de le dire dans leur langue. Si l'exercice n'est pas directement littéraire, il stimule un art d'écrire en prise sur les propriétés de la langue : en l'espèce, la distinction entre

deux aspects du temps verbal, le présent historique et le présent de narration.

Quel rôle pour la pédagogie du secondaire français en classe de littérature à l'université japonaise ?

Marie-Noëlle Beauvieux

En France, dans l'enseignement secondaire, on considère que la littérature est chargée de donner aux élèves une culture humaniste et une ouverture sur le monde, de permettre la formation du jugement et de l'esprit critique et de développer une conscience esthétique¹. En général, elle est proposée dans les classes sous deux formes : la lecture analytique d'un texte court proposé à l'interprétation, et la lecture cursive d'une œuvre entière exploitée ponctuellement. Ces lectures sont associées à trois types d'exercices qui permettent d'approfondir le rapport à l'œuvre et de questionner ce qu'elle transmet : le commentaire de texte, qui repose sur l'analyse stylistique, la dissertation, qui implique de pouvoir discuter d'une ou de plusieurs œuvres de manière globale et enfin l'écriture d'invention. Ces pratiques paraissent transposables dans le cadre d'un cours donné à des étudiants non natifs si l'on recourt à la fois au texte en langue originale pour la pratique de la lecture analytique, et à la traduction pour la lecture cursive, tout en proposant des devoirs à effectuer selon les besoins dans la langue maternelle ou dans la langue apprise. Ainsi, une version simplifiée du commentaire peut être effectuée en français, tandis que les exercices d'écriture d'invention peuvent être donnés dans la langue maternelle de l'étudiant pour que l'appropriation de l'univers de l'œuvre puisse se faire dans un dialogue avec l'univers culturel de l'étudiant : les discussions ouvertes ensuite sont ainsi plus dynamiques. La langue utilisée pour les petits essais proches de la dissertation est laissée au choix de l'étudiant, de manière à ne pas pénaliser la réflexion. L'objectif n'est pas de reproduire une classe française au sein de l'université japonaise mais de repenser l'enseignement de la littérature à partir de « gestes appropriatifs² » pour répondre à un public qui, même spécialiste, montre parfois un manque de familiarité avec la lecture.

Initiation à la stylistique du texte littéraire

Raphaëlle Brin

¹ Voir Sylviane Arh, *Former à la lecture littéraire*, Futuroscope, Canopé, 2018.

² Bénédicte Shawky-Milcent, *La Lecture, ça ne sert à rien ! Usages de la littérature au lycée et partout ailleurs*, PUF, Paris, 2016, p. 97.

Le texte littéraire peut se concevoir comme un « “laboratoire” où le langage est en “expérience” » ; le texte n’est plus seulement un « supplément culturel », mais une « assise fondatrice de l’enseignement de la langue³ ». Par une initiation à la stylistique de textes littéraires authentiques, il est ainsi possible de viser trois objectifs. Le premier d’entre eux est de faire prendre conscience aux étudiants que les choix des mots et leur organisation sont significatifs : les étudiants apprennent à identifier et à nommer les procédés stylistiques, tout en ne perdant pas de vue l’interprétation de ces procédés. La question essentielle reste la suivante : comment la forme participe-t-elle au sens ? Le second objectif est de leur faire acquérir, par le biais de textes variés, des repères d’histoire littéraire et d’histoire culturelle. Enfin le troisième objectif est d’ordre linguistique : il s’agit de stimuler l’apprentissage de la langue par l’étude du texte mais aussi par des activités de production pouvant prendre la forme d’interventions orales et de restitutions écrites.

L’analyse stylistique reposant sur la notion d’écart, il est important de ne pas choisir le texte pour sa simplicité syntaxique ou lexicale. En effet, les difficultés peuvent être levées par une préparation à la maison guidée par des explications (sous la forme de synonymes, de paraphrases ou encore d’illustrations) et des questions qui permettent de faciliter le repérage. En classe, il s’agit d’« apprivoiser » le texte par la lecture, le partage des impressions et quelques exercices préliminaires avant de passer au repérage des procédés stylistiques. À partir des réponses mises en commun, on commence le travail d’interprétation. Enfin, la séquence se termine par un travail de production : restitution du travail fait en cours sous la forme d’un commentaire d’une page, écriture d’invention...

On peut ainsi aborder des notions simples, comme le champ lexical, la différence entre la comparaison et la métaphore, s’entraîner à observer le vocabulaire utilisé, par exemple par le repérage du lexique mélioratif ou péjoratif, ou encore s’interroger sur les différentes valeurs des tiroirs verbaux comme le conditionnel.

Pédagogies de la littérature française

Yosuke Fukai

La littérature française n’est pas incompatible avec la pédagogie de la langue : elle en est au contraire une composante reconnue par le Cadre Européen Commun de Référence

³ Jean Peytard, « Sémiotique du texte littéraire et didactique du F.L.E. », in *Études de linguistique appliquée*, 1982, n°45, p. 95-97.

pour les Langues, qui, tout en reconnaissant l'importance de l'étude de la littérature en tant que telle, recommande aussi la pratique d'« activités esthétiques » relevant de « la production, la réception, de l'interaction ou de la médiation⁴ ». C'est dans ce cadre qu'on peut proposer, par exemple, à des étudiants en fin de deuxième année de lire et d'analyser pendant un cours de langue le poème d'Arthur Rimbaud intitulé « Le Dormeur du val ». Ce sonnet est particulièrement intéressant : il permet aux étudiants de repérer facilement la rime ; le lexique est relativement abordable ; les étudiants peuvent reformuler le contenu du poème avec leurs propres mots ; sur le plan culturel, il permet d'évoquer la guerre franco-allemande de 1870 par l'universel transmis par ce poème (la mort d'un jeune soldat) ; il est structuré par des oppositions facilement repérables : vert / rouge, paix / guerre, vie / mort, un / deux...

La littérature est aussi un appui indispensable pour les activités linguistiques hors de la classe. Dans les trois exemples suivants de projets de création de film, la littérature joue un rôle considérable lors de l'écriture du scénario. Dans le cadre du projet *Tokai Nouvelle Vague*, les étudiants ont lu des œuvres littéraires et choisi des citations célèbres pour écrire des dialogues ; lors du projet *Qui suis-je*, le deuxième épisode s'est appuyé sur le roman *Le Rouge et le Noir* de Stendhal. Lors du projet PRISE financé par la Suisse, les étudiants de l'Université du Tohoku et les étudiants de plusieurs établissements suisses ont créé un scénario original sur le thème de l'écologie, reposant sur une légende arthurienne mettant en scène un chat mangeur d'hommes ; cette légende a été lue attentivement, discutée en groupe puis modifiée selon les besoins du scénario. Ainsi, à travers la lecture et l'écriture, les étudiants apprennent à s'approprier des œuvres en découvrant une culture étrangère de manière active et dialogique, pour finalement la présenter, à leur manière, à un nouveau public.

⁴ Conseil de l'Europe, *Un cadre européen commun de référence pour les langues : apprendre, enseigner, évaluer*, Didier, Paris, 2005, p. 47.

II 書評

森田美里 (著)『フランス語の話し言葉における舌打ち音の研究』、くろしお出版、2021年

評者：安藤博文（静岡大学）

本書評では、2021年2月に上梓された森田美里著『フランス語の話し言葉における舌打ち音の研究』（以下、本書）を取り上げる。タイトルから見ても画期的であるが、読み進めてみると、実に綿密な調査に基づいて行われた研究であり、そしてコミュニケーションに対しても示唆に富んだ内容であることがわかる。

著者の森田美里氏は、日本語教師として数多くの日本語学習者と接するうちに、フランス語圏の学習者が共通して発する特有の「舌打ち音」に気づくことになり、これを研究テーマと定めた。日本語母語話者として奇異に感じネガティブな印象を持ってしまうこの舌打ち音であるが、本書の調査からわかる通り、フランス人においてはそれを発する際にはほとんど意識しておらず、言葉に詰まったり、迷ったりしたときに無意識に発してしまうものである。また、発したことを指摘された際にも、多くの場合に後から思い出せない。さらに評者自身の経験で恐縮であるが、フランス在住より帰国したとき、自分で無意識にこの舌打ち音を出している（またはため息をついている）ことを知人に指摘され、驚いたことがある。

本書第2章では、先行研究を探る中で、いいよどみの際に現れる「フィラー」（例として「えーと」や *eah* など）と舌打ち音との類似性に着目することとなった道筋が示されている。続く第3章では著者の録音や書き起こしによって収集した4種類のデータが紹介され、フィラーとの関連で考察がなされている。第4章、5章ではそれぞれ大規模コーパスを用いて、舌打ち音の生起環境の抽出を行っている。第6章では、以上のコーパスの分析から得られた、「話者の情報処理および言語表現処理状況の表出機能」、「シンタックスによって調整された談話構成」、「働きかけの機能」という3つの機能とその下位に位置する用法を提案している。

これらの心理言語学的、社会言語学的な知見から得られた、舌打ち音の言語研究における位置づけはどのようなものであろうか。本書の第7章では、フランス語話し言葉における舌打ち音は、話し手による産出として[随意的・不随意的]、[意識的・無意識的]なのか、聞き手による受容として[意識的・無意識的]なのか、というパラメーターを通して、「言語情報」、前述の「フィラー」、「ジェスチャー」などの非言語コミュニケーションの様式や、「くしゃみ」などのような

生理的な音といったものとの産出・受容との比較を行っている。その結果、「舌打ち音には音声的な句切りというペリレキシック的な要素があり、身体的表現の中で最も発声があり、言語的表現の中で最も発声がない」(p. 154)という特性、つまり位置づけを明らかにしている。

従来であれば、舌打ち音は人間が発声発語器官を使用して産出しているのにも拘わらず、「言語音」として捉えられることはなく、フランス語学、特に音声学や音韻論、統辞論や意味論の範疇の研究とはなりえなかった。しかし本書ではその立ち位置を明確にして見事に言語学的研究に昇華させている。確かに、André Martinet が提唱する言語の二重分節性における第一次分節を構成する単位としての音、すなわち言語音として舌打ち音を認めるのは難しい。しかし、Ferdinand de Saussure 流に考えたとき、ある社会集団における共通の意味 (signifié) を持つ音 (signifiant) として舌打ち音を捉えることができ、また、(従来の言語学的に言われている) 言語音と同じように意味と音の間の恣意性が存在するということになる。当然これだけをもって即座に舌打ち音を言語音であると認めるのは難しい。しかし、言語音を超えつつも、あくまでも言語音とつかず離れずの関係である舌打ち音の研究は、従来の枠組みにとらわれない言語研究、特に語用論や心理言語学、社会言語学の新しい地平を切り開くことを期待させる。単に「音声言語」に留まらない本書の目の付け所は、境界線上にある、古くて新しい問題を提起してくれる。

そして、研究者であると同時に教師でもある著者は、本書において言語的な基礎研究を取り上げることに留まらず、教育への応用研究に触れることを忘れていない。第8章では、日本人フランス語学習者における舌打ち音の調査研究がなされている。フランス人からは無意識に産出される舌打ち音だが、日本人にとっては不機嫌さを表すものであったり感じの悪いものと捉えられる傾向にある。これは日本語母語話者である我々の多くにも経験のあるところであろう。そこで著者は、学習者の自己評価や情動、すなわち情意フィルターにも着目し、日本人学習者におけるフランス人の舌打ち音の受容に対して明確な説明を与えることに成功している。それをもとに、フランス語教育の場面においても、教師は、日本語とは異なるフランス語の舌打ち音の機能、用法などを学習者に伝えることができれば、学習やコミュニケーションがより円滑になるであろうことを示唆している。このように本書は、教育への応用までが考えられた類いまれなる良書ということができる。

本書に掲載された舌打ち音研究の卓越性と緻密さは、「2017年日本フランス語フランス文学会学会奨励賞」を受賞していることから証明されている。フランス語教育やフランス語研究に携わる人に対して大きな影響を与えることと成るであろう本書の出版に賛辞を送りたい。

Gustave Flaubert, *Cabane fantastique, édition diplomatique de la deuxième version (1856) de La Tentation de saint Antoine*, édition et introduction par Atsuko OGANE, Genève, Droz, 2021.

評者：金崎春幸（大阪大学）

本書は、1856年に執筆されたフローベール『聖アントワーヌの誘惑』第二稿の清書原稿の転写版である。フランス国立図書館でNAF 23665という番号をつけられた193枚の草稿の表頁のファクシミリ版が見開きの右側にあり、その左側には大鐘敦子氏による転写があるという構成になっている。巻頭には、『聖アントワーヌの誘惑』の最初の構想から第一稿（1849年）および第二稿の執筆に至る過程を説明し、さらに第二稿において新たに加わった要素を最終稿（1874年）への流れの中に位置づけた序論が置かれている。

第二稿はネブカドネザルとシバの女王など4つの断片が『アルティスト』誌に掲載されただけで、全体はフローベールの生前には出版されなかった。初めて活字になったのは、1908年、ルイ・ベルトランによって編纂された『初稿聖アントワーヌの誘惑（1849-1856）』である。ベルトランは、1849年9月にブイエヤデュ・カンの前で朗読された草稿の存在は認めつつも、1856年の清書原稿をより凝縮された稿とみなし、「初稿」として公表したのである。ベルトランの版は表題のみならず、テキストそのものにも問題をかかえていた。たとえば、第II部でアントワーヌが聖書を開いて創世記38章のタマルの物語を読む場面で、「（タマルは舅のユダが）羊の毛を刈るためにティムナにやってくる（と聞いて）寡婦の服を脱いだ」という箇所が草稿では書かれているのに、ベルトランの版では欠落している。とりわけ「寡婦の服を脱いだ」は、ほどなくアントワーヌの目の前にタマルが「ひとりの女」として娼婦の姿であらわれ、「牧人」であるユダを誘う情景への導き手となるだけに、なくてはならない一節である。この欠落は、ベルトランの版から100年以上経った2013年に刊行されたブレイアード版でも無批判に受け入れられている。大鐘敦子氏は186頁で聖書を読む場面の草稿を忠実に転写するとともに、序論のXXVIII頁でブレイアード版に当該の箇所が抜け落ちていることを適切に指摘している。

本書は既存の版の欠陥を補うだけでなく、さまざまな工夫によって、転写を見ながらフローベールの創作の場に居合わせるような体験を読者に与えてくれる。羽根ペンで抹消された箇所は線が分厚くて判読が難しいのだが、転写では抹消線の太さはそのままに、濃い灰色にして、黒い文字が浮き出るようにしている。鉛筆書きのところは淡い灰色にして、インクの文字や線と区別している。第II部や第III部のいくつかの頁の上部あるいは左上の余白に、おそらく1869年のものと思われる鉛筆での書き込みがあるのだが、それも淡い灰色の文字でしかる

べき位置に置かれることによって、見直しのための加筆であることが示されている。文字や線の空間配置だけではなく、執筆の時間性も転写から読み取ることが可能なのである。

第二稿の生成過程を解明する上で、下書き (brouillon) の存在は無視できない。おおよそ 200 枚の下書きが数えられ、多くが表裏に書かれているから、400 頁近くあることになる。大鐘敦子氏の転写は、下書きを完全には踏まえていないため、抹消線のある箇所などの判読にいくつか不十分な点があることは否定できない。一例を挙げよう。空想上の動物の群れを前にしてアントワヌが発する言葉の中で、224 頁の転写では « formes douteuses d'une insaisissable Substance » 「捉えがたい物質 (実体) の怪しげなかたち」に抹消線が引かれ、その前の同じく線の引かれたところには判読不能のしるしがついている。一方、この頁の下書きにあたる BnF, NAF 23668, f° 371 v° を見ると、上記の箇所は抹消線なしで書かれ、転写では判読不能とされている部分には « manifestations d'une incompréhensible Pensée » 「理解しがたい思考のあらわれ」と書かれている。つまり下書きの段階では « Substance » と « Pensée » が対になって、得体の知れない動物たちをあらわす表現の中で用いられていたのである。大鐘敦子氏は序論の XXV 頁で、この « Substance » がスピノザ的な実体という意味よりむしろ科学的・物質主義的な意味で使われていると述べている。そのような解釈も成り立つと思われるが、« Substance » と « Pensée » とが並んで用いられていることを考慮すれば、宇宙飛翔の場面での « Je me sens Substance. Je suis Pensée » (転写では 256 頁) というスピノザ思想にのめり込んだアントワヌの叫びにつながるものと考えられるだろう。

『聖アントワヌの誘惑』はテキスト自体が難解な上、初めの二つの稿の清書には削除や修正があふれ、しかもフランス国立図書館の下書きやプラン・ノートは三つの稿が入り混じっている状態では、多くの研究者がしり込みするのも無理はない。その中で、大鐘敦子氏が果敢に挑戦し、研究されることの少ない第二稿の草稿の転写を世に出したことは画期的な出来事である。本書が基本的資料としての価値を末永く保ち続けることは間違いない。

Takao Kashiwagi (Université d’Osaka)

Balzac Multiples genèses de Takayuki Kamada conclut quinze ans d’étude génétique depuis son premier livre, *La Stratégie de la composition chez Balzac : essai d’étude génétique d’Un grand homme de province à Paris* (Surugadai-shuppansha, 2006) et une maturation de plus d’un demi-siècle depuis la publication en 1966 des *Œuvres romanesques avortées de Balzac (1829-1842)* de Tetsuo Takayama. Avec cet ouvrage, les balzaciens japonais achèvent leurs recherches génétiques balzaciennes.

Le livre de T. Kamada est composé en cinq parties. La première partie, « La génétique textuelle face au corpus balzacien » entend l’histoire des études génétiques du corpus balzacien de la documentation de Charles de Lovenjoul jusqu’aux travaux des chercheurs dans la dernière décennie. Nous y rencontrons des noms familiers aux balzaciens, membres de l’Institut des Textes et Manuscrits Modernes (ITEM) et du Groupe International de Recherches Balzaciennes (GIRB). T. Kamada retrace la bataille entre la critique génétique et la critique herméneutique dans les années 1960-1980, soit le sujet de l’efficacité interprétative de la critique génétique. Il dépeint en détail les chemins du nouveau courant d’étude développés par Gérard Genette jusqu’à la jeune génération balzacienne après 1980, en se référant à plusieurs colloques organisés par le G.I.R.B. qui apportèrent les fruits des études génétiques. Il se réfère également au « socio-génétique » qu’a avancé Claude Duchet des années 1980, et il explique comment *Les Travaux et les jours d’Honoré de Balzac* de S. Vachon (1992) a contribué à l’établissement de la « macrogénétique » en poursuivant « l’élaboration permanente des grandes structures romanesques et des stratégies de reclassement chez le romancier » (p. 29). Il n’oublie ni la discussion sur « l’avant-texte » dont Jean Bellemin-Noël est un précurseur, ni les définitions de la génétique textuelle qui ont été posées par Gérard Genette dans les années 1990. Pour conclure la première partie, l’auteur rappelle le travail de Lovenjoul, fondateur des études génétiques balzaciennes, consacré aux *Paysans*.

La deuxième partie, « Processus et techniques de création », expose les principaux éléments de mise en œuvre des techniques rédactionnelles de Balzac. T. Kamada détaille les exemples du travail préparatoire et programmatique chez l’écrivain, en figurant la modélisation des corrections balzacienne et « la gestion rédactionnelle ». À partir des études de Suzanne Jean Bérard de la formation d’*Illusions perdues*, il parcourt le cheminement de Balzac, suivi par les chercheurs génétiques dans le fonds documentaire de Lovenjoul et les éditions successives du romancier qui les a compilées en une vingtaine

de volumes de *La Comédie humaine*. En guise d'exemple, T. Kamada établit le processus balzacien complexe qui mène au texte d'*Un grand homme de province*.

Après la discussion de l'axe de typologie et de manuscrit chez Balzac, commence la troisième partie : « Ordonnance d'une œuvre totalisante » par l'interrogation sur la parution et l'élaboration « des éléments d'organisation conceptuelle et éditoriale d'une somme romanesque ». En remarquant que la publication des textes littéraires en forme d'œuvres complètes était à la mode dans la première moitié du XIX^e siècle en France, T. Kamada suit chronologiquement les moments significatifs dans la construction du « *Liber Mundi* » de l'écrivain : de ses romans de jeunesse (1823-1825), la *Physiologie du mariage* (1829), *La Peau de chagrin* (1831) et les *Études de mœurs au XIX^e siècle* (1834-1837) à *La Comédie humaine* (1842-1848), apparaît « la complexité des gestes éditoriaux chez Balzac sous l'aspect de la déclinaison des modes de la publication et des divisions textuelles » (p. 184). Le système bien connu aujourd'hui des personnages reparaisants est naturellement analysé selon le point de vue génétique. Après avoir reconstitué l'histoire de ce système, T. Kamada étudie, déployant ses compétences de critique génétiste, les exemples concrets de quelques personnages (Lousteau, Rastignac et Taillefer).

La quatrième partie : « Paratextes et fragments insérés » explique la théorie de « paratexte » proposée par Genette. Partant de Genette et de ses épigones, T. Kamada présente « les éléments paratextuels » de Balzac, les changements des titres de ses œuvres, la signification de leurs préfaces entre autres. En choisissant *Illusions perdues* et *Histoire de la grandeur et de la décadence de César Birotteau* comme exemples de changement des titres en cours de publication, T. Kamada révèle le processus évolutif des manuscrits autographes et des séries d'épreuves corrigées par l'écrivain ; il reconstruit scrupuleusement sa logique directrice de différenciation et d'intégration.

Son analyse porte également sur la fonction des préfaces balzaciennes. À qui le romancier dédie-t-il ses ouvrages ? Il énumère les noms des destinataires chronologiquement et établit la stratégie et la signification de ces dédicaces. L'analyse de la dédicace à Victor Hugo pour *Illusions perdues* de l'édition Furne de 1842 est un de ces bons exemples qui nous montrent la perspicacité et l'habileté de T. Kamada en tant que génétiste. Les remarques sur les enseignes commerciales de *César Birotteau* et sur celles d'*Illusions perdues*, ou sur le dispositif textuel des poèmes de Lucien de Rubempré, comme « enjeux textuels », sont également très intéressantes.

Pour la démonstration de la méthode génétique appliquée aux œuvres balzaciennes, T. Kamada aborde le dossier de *César Birotteau* dans la cinquième partie : « Axes de dynamisation du récit – le dossier de *César Birotteau* ». Après avoir examiné l'histoire du texte en parcourant les documents, il applique sa méthode à la transformation du

prospectus pour l'eau carminative et la pâte des Sultanes, marchandises du parfumeur Birotteau. De la modification et de la correction du texte par le romancier émerge le secret de la stratégie balzacienne pour la construction de son monde romanesque. Cette recherche l'amène à redécouvrir le rôle important du personnage de banquier alsacien Nucingen et celui de son accent caricatural dans *la Maison Nucingen*. T. Kamada conclut la dernière partie de ce livre par l'étude de la scénographie de table à manger dans *La Comédie humaine*, surtout par celle de *César Birotteau*.

La conclusion de ce livre résume les cinq étapes de l'étude ; T. Kamada y remarque que « plusieurs dizaines, voire centaines de dossiers d'œuvres sont en attente de réexamen de fond », et à la suite de cette étude, il prévoit déjà des « travaux futurs, plus amples et transversaux ». N'oublions pas d'apprécier l'*Annexe* très précieuse dans laquelle on retrouve facilement la liste des manuscrits et les épreuves de chaque œuvre de *La Comédie humaine*.

Ce volumineux et riche ouvrage est une compilation des travaux de l'auteur qui, travaillant en étroite collaboration avec de nombreux chercheurs balzaciens au Japon et en France au cours de ces vingt dernières années, a produit des résultats constants dans le domaine des études génétiques balzaciennes. Les études génétiques japonaises produisent d'excellents résultats dans les champs des recherches de Proust et de Flaubert. Avec T. Kamada, nous avons un chercheur pionnier dans le domaine des études génétiques balzaciennes.

Il est à noter que son étude repose sur une recherche approfondie des matériaux, manuscrits et épreuves conservés dans le fonds Lovenjoul, et utilisés selon un raisonnement rationnel. Le détail de l'histoire de la formation de chaque œuvre de *La Comédie humaine*, ainsi que des étapes franchies par les balzaciens français jusqu'à nos jours, qui est précisé dans les premiers chapitres, sera un précieux guide, extrêmement utile non seulement pour les jeunes chercheurs qui abordent *La Comédie humaine* mais aussi pour tous ceux qui s'intéressent aux études génétiques en général. Nous devons aussi féliciter l'auteur de ce livre pour le respect et la familiarité profonde qu'il montre envers ses précurseurs et ses collègues des études balzaciennes mentionnés dans ce livre.

Tous ceux qui ont analysé eux-mêmes un ou plusieurs romans de Balzac seront amenés à oublier leur propre vision au profit d'une lecture plus générale, comme le dit T. Kamada : « L'objet final de la génétique balzacienne est d'appréhender dans son *ensemble* un mouvement de genèse des plus complexes » (p. 12-13). Perspective très enrichissante ; il faut s'attendre à ce que les recherches de ses collègues soient confrontées à son analyse d'ensemble. En effet, l'étude génétique n'est pas nécessairement en opposition stricte avec l'herméneutique sur laquelle d'autres s'appuient. Le déchiffrement qui accompagne

les études des transitions textuelles de César Birotteau et du baron Nucingen dans les deux dernières parties apporte une lecture perspicace et une compréhension profonde du texte balzacien.

Plus d'un demi-siècle est passé depuis la parution de l'œuvre critique novatrice de Tetsuo Takayama ; Takayuki Kamada a su reprendre à son compte le développement des études génétiques. Nous autres balzaciens japonais sommes très heureux de trouver un nouveau génétiste parmi nous, dont le travail est à la fois l'aboutissement de longues recherches et le point de départ des nouvelles recherches qu'il vient d'ouvrir pour tous les balzaciens.

「échos（会員投稿欄）ご投稿のお願い」

échos（会員投稿欄）では、会員の皆様から広く投稿を募っています

◇ 内容について フランス語、フランス文学、フランス語圏、ないしは本学会にかかわるものについてのエッセーを広く募集する。例えば、自分とフランス語圏文学とのかかわり、学会とのかかわり、内外の講演会やシンポジウムの体験記、支部会イベントの報告など。

◇ 分量 cahier 2 頁分（2000 字程度）を上限とする。

◇ 掲載の可否について 研究情報委員会での審議を経て掲載の可否を決定する。掲載の可否については個別に対応していくことになるが、最低限の基準として以下の項目を設ける。

- ・ 特定の個人や団体への誹謗・中傷のあるものは掲載しない。
- ・ 「フランス語、フランス文学、フランス語圏、ないしは本学会にかかわるものについてのエッセー」であること。

◇ 締め切り 毎年 3 月・9 月末日

◇ 宛先 日本フランス語フランス文学会研究情報委員会までメールでお送りください：
cahier_sjllf@yahoo.co.jp

- * 掲載の可否についての個別のお問い合わせには、原則として応じかねます。
- * 内容に相違のない範囲で、軽微な修正を施した上で掲載させていただくことがあります。その場合にはご連絡いたします。

書評対象本推薦のお願い

日本フランス語フランス文学会では学会広報誌 **cahier** および学会ウェブサイトにて公開する書評作成にあたり、広く対象となる本を募集しています。つきましては、下記の要領により、書評対象として相応しいと思われる本をご推薦いただければ幸いです。なお、ご推薦いただいた本は研究情報委員会で集計し、書評する本を決定させていただきますので、必ずしもご推薦いただいた本の全てが書評されるわけではありません。

◇ 目的 日本におけるフランス語、フランス文学研究の成果を収集し、権威付けされた書評ではなく、内容紹介的な書評により公開する。

◇ 書評の対象 原則として、過去1年間に刊行され、その内容から広く紹介するに相応しい学会員による著書を対象とする。翻訳なども含み、日本で刊行された著書には限らない。フランス文化、映画などに関する著書も排除はしない。

◇ 推薦要領 学会員による他薦を原則とします。著者名・書名・出版社名・発行年月を明記の上、紹介文（200字程度）を付してください。著作のみの送付については対応しかねますので、ご遠慮ください。

◇ 締め切り 毎年3月・9月末日

◇ 宛先 日本フランス語フランス文学会研究情報委員会までメールでお送りください：
cahier_sjllf@yahoo.co.jp

また、学会ウェブサイト **cahier** 電子版の「書評コーナー」に掲載する書評も以下の要領で募集しております。

◇ 目的および書評の対象 上記の書評対象本と同じ。

◇ 執筆要領および締め切り、原稿送付先 学会員による他薦の書評あるいは自薦の自著紹介で、著書名・書名・出版社名・発行年等を除いて800字以内の原稿を随時受け付けておりますので、上記の宛先にお送りください。

なお、これらの書評のうち **cahier** にも掲載するに相応しいと委員会で判断したものについては、他薦の場合は **cahier** 用に2000字程度に手直しをお願いすることがあります。また、自薦の場合は委員会で執筆者を選定して依頼します。

cahier 29

編集 研究情報委員会

発行日：2022年3月31日

日本フランス語フランス文学会

150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館 505

TEL：03-3443-6671 FAX：03-3443-6672